



原いをこめてサードブック ～吹上地域女性連絡協議会の取組～

ブックスタートは、1992年にイギリスで始まった絵本を通じた子育て支援運動です。日本では、平成12年を「子ども読書年」と定め、子どもの読書活動を推進する機運が高まりました。また、「子どもの読書活動に関する法律」により、4月23日が「子ども読書の日」と定められています。こうした流れを受け、絵本の読み聞かせや絵本のプレゼントを行うブックスタートの取組が広がりました。



—入学式に本のプレゼント—

旧吹上町では、そのわずか2年後の平成14年から、当時の有馬澄子婦人会会長の発案により、子どもたちの成長に合わせて絵本を2冊ずつプレゼントするブックスタートを開始しました。吹上保健センターで実施される「3・4ヶ月児健診」の日に、ふきあげ図書館司書、読み聞かせボランティアグループ会員と婦人会会員が参加し、絵本の読み聞かせや手遊び、ブックスタートの説明を行い、絵本2冊をプレゼントしました。

平成17年に4町が合併して日置市となり、「日置市地域婦人会」が誕生しました。ブックスタートは、平成25年から日置市の支援を受け、市全域で市地域婦人会が主体となって取り組むこととなりました。現在も、6～8ヶ月児健診時に市からお祝いのメッセージと絵本2冊をプレゼントしています。また、吹上地域女性連では、独自に「1歳児育児相談」の日のブックスタートも継続して実施していましたが、実施時期を見直すこととなりました。令和2年からは、小学校入学時に「サードブック」として、図書館司書の助言をもとに



女性連会員が本を選定、町内の4小学校の入学式に訪問し、お祝いのメッセージを添えて本をプレゼントしています。

女性連会員の減少で、予算面の厳しい状況もありますが、子どもたちの喜ぶ顔や保護者の皆さんからの感謝の言葉を励みに子どもたちの健やかな成長を願い、今後も継続していこうと会員で確認しています。

「Iがいっぱい あいさつ運動」 ～いちき串木野市の教育理念「認め・支え・学び」～

【趣旨】

本市の教育理念体现の第一歩として、地域社会の絆を深め温かく、思いやりに満ちたまちになることを目的とし、学校や家庭・地域をはじめ、企業や関係団体等、全市民の協力を得て住む人が互いに尊敬と感謝の気持ちをもった「愛が溢れるコミュニティ」を築き、地域全体が未来に向け成長する明るいまちづくりを目指しています。

- 「Ichikikushikinoshi」の表記には「i」がいっぱい
- いっぱいの「i」を、溢れる「愛」と掛け合わせ
- 「i」は「I（私）」。市民の主体的な取組へ…

【取組対象】学校、家庭、地域住民、事業所、関係団体、市役所等、地域に関わる全ての方々

【取組内容】

- あいさつ標語・シンボルマークの募集、のぼり旗・ポスターの製作（R6）
- 「あいさつ運動宣言団体」の募集（R7～現在26団体）

いちき串木野市役所、市来幼稚園、生福小学校、羽島小学校、市来小学校、旭小学校、川上小学校、市来中学校、串木野中生徒会、モンシェリー松下(株)、(株)満留建設、(有)大興電設、日本地下石油備蓄(株)、高齢者クラブ連合会、(株)国料建設、社会福祉協議会、(有)須納瀬設備工業所、串木野神社、地域女性団体連絡協議会、管工事組合、(有)満留電気、串木野ライオンズクラブ、民生委員児童委員協議会、湊地区まちづくり協議会（非公表2団体）

- あいさつをテーマした講座

- 幼児向けあいさつ運動の展開（R8～）

- 市内に在籍している幼児（3歳～5歳）対象者約400名
- 「おはようございます」「いただきます」「ごちそうさま」「おやすみなさい」を家庭で言えるように！
- 60日間の達成であいさつストラップをプレゼント

- あいさつ運動宣言団体情報交換会の開催（R8.7.9）

- あいさつの日の設定について（毎月1日・20日）
- 各団体の連携した取組について



—のぼり旗—



—宣言団体に登録証の交付—
(有)須納瀬設備工業所



公式キャラクター
「いちくっしー」
ストラップ

わが市 わが町 わが村からの発信

～伝統芸能、文化財、社会教育に関する特色ある取組の紹介～



島の伝統を未来へつなぐ 硫黄島の八朔太鼓踊り 三島硫黄島学園の伝承活動の取組

三島村の硫黄島には、先人から受け継がれてきた伝統芸能「八朔太鼓踊り」があります。旧暦8月1日と2日の二日間、熊野神社に奉納されるこの行事は、島民の無病息災や五穀豊穡を願う祭りとして親しまれ、硫黄島の三大芸能の一つとして大切に守られてきました。背中に高い矢旗を背負い、胸の太鼓を力強く打ち鳴らす姿には島の歴史と誇りが息づいています。今年は9月11日(金)・12日(土)に行われました。

三島硫黄島学園では、この伝統を次代につなぐため、地域と学校が協力して準備を進めます。太鼓のバチや矢旗、メンドンの面づくりなど、子供たちは地域の方々と一緒に手を動かし、ものづくりの楽しさと文化の重みを感じています。踊り子とメンドンの役割には男子児童生徒と男性職員のほとんどが参加し、島の祭りを支える一員として誇りをもって取り組んでいます。

踊りの練習は約2週間続き、後期生と教職員が毎日参加します。地域の方々から細やかな指導を受けながら、足腰が震えるほど体力を使う踊りを少しずつ身に付けていきます。実際に踊るのは後期生からですが、5・6年生も練習に加わり、先輩の姿を見て学ぶ風習が受け継がれています。こうした世代を越えた学びは、硫黄島ならではの教育の魅力です。

しおかぜ留学生として参加した生徒は「練習から本番まで緊張したが、地域の支えで最後まで踊りきれた。仲間との絆が深まり貴重な経験になった」と語ります。7年生の生徒も「昨年は練習だけだったが、今年は踊り子として参加できることが楽しみ」と期待を膨らませていました。

当日、誇らしげに太鼓を打ち鳴らす子どもたちの姿は、地域の文化を体験し、郷土への思いを深める学びそのものです。

「八朔太鼓踊り」は、これからも子どもたちとともに受け継がれ、島の未来へと響き続けていくことでしょう。



—八朔太鼓踊り—



—メンドン—



—矢旗づくり—

どこか懐かしい、地域と共に育つ子どもたち ～諏訪之瀬島社会教育学級の取組～

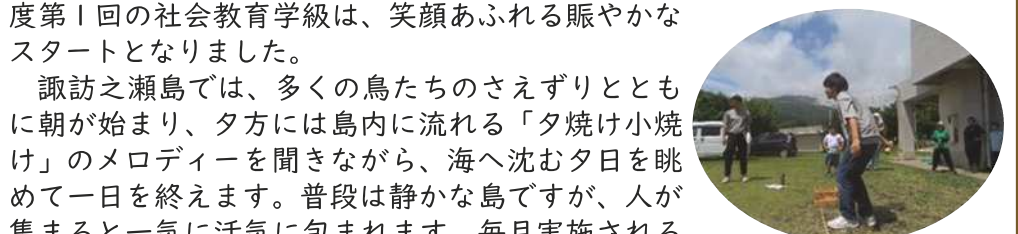
モルックがプレーヤーの手を離れ、50点に到達する「11点のスキットル」を倒した瞬間、大人も子どもも大きな歓声を上げ、接戦を繰り広げた相手チームからは温かな拍手が送られました。初夏の爽やかな青空の下、今年度第1回の社会教育学級は、笑顔あふれる賑やかなスタートとなりました。

諏訪之瀬島では、多くの島たちのさえずりとともに朝が始まり、夕方には島内に流れる「夕焼け小焼け」のメロディーを聞きながら、海へ沈む夕日を眺めて一日を終えます。普段は静かな島ですが、人が集まると一気に活気に包まれます。毎月実施されるリサイクル活動には、子どもたちを含め島民が協力して参加しており、そのエネルギーにどこか懐かしさを感じます。また、5月の島民合同体育大会に向けた愛校作業では、重機やチェーンソー、刈払機の音が島中に響き渡り、まるで開拓作業を思わせる力強い光景が広がっていました。そして、一週間後の体育大会では、多くの笑顔と歓声があふれ、世代を超えた交流の輪が広がりました。

本校区の社会教育学級は、世帯数が少ないこともあり、幅広い年代へ参加を呼びかけています。子ども会もその一員として活動に加わり、モルックやボッチャなどのニュースポーツ交流会では、地域の方々と共に汗を流しています。さらに、島内道路の美化作業にも参加し、地域を支える大切な役割を担っています。近年、地域コミュニティでは、人との関係の希薄化や「誰かがしてくれるだろう」という人任せの風潮が課題として挙げられています。

しかし、この島には、年齢に関係なく「できる人が、できることをする」という温かな風土があります。

長い年月をかけ受け継がれてきた「ともに支え合う文化」はこの島の大きな財産です。子どもたちは、地域の方々の姿から、支え合うことの大切さや人とのつながりの温かさを学んでいます。



—モルックで交流する様子—



—ニュースポーツで交流—